

## マタイ27章51節 「神に近づける恵み」

### 1A 神殿の幕が裂けることの意味

#### 1B 仕切りとなる罪

#### 2B 神の贖罪

##### 1C 原初の住まい

##### 2C いけにえ

##### 3C 幕屋(幕による仕切り)

##### 4C 大祭司による贖罪

#### 3B 肉体を取られた神

##### 1C 肉体という幕屋

##### 2C 汚れに触れられる方

##### 3C 罪を負われる方

#### 4B 大胆に近づける神

##### 1C 神ご自身に

##### 2C 互いに

##### 3C 神と子羊の中にあるエルサレム

### 2A 上から下に裂けることの意味

#### 1B 御霊による誕生

#### 2B 上から下への下降

#### 3B 永遠の救い

## 本文

マタイによる福音書 27 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、27 章の途中まで来ています。午後礼拝で、27 章を読み終えます。イエス様が十字架を担ぎ、磔にされ、死なれ、埋葬されるところまでです。今朝は、27 章 51 節に注目します。「すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」イエス様が、十字架に付けられました。そして午後三時を過ぎ、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という言葉を叫ばれました。そして、「再び大声で叫んで霊を渡された。」とあります。その後、大きな出来事が起こります。神殿の幕が上から下に真っ二つに裂けました。まるで雷が落ちたかのように、今度は、地面が揺れ動き、岩が裂けました。それから、なんと墓が開きました。後で、神を信じて死んだ聖徒たちが、墓から出て来ることとなります。そういった一連の出来事を目の前で見ていたローマの百人隊長が、「この方は本当に神の子であった。」といひます。

神殿の幕が真っ二つに裂ける出来事にある象徴的な意味を見て行きたいと思います。

## 1A 神殿の幕が裂けることの意味

### 1B 仕切りとなる罪

私たちが人間関係で、その関係が気まずくなる時に、「壁ができてしまう」と言いますね。心の壁という言葉もあります。すべてのことを分かち合うことができなくなり、それで分離できる壁、あるいは仕切りを設けていることです。「イザ 59:2 むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」神が私たちから離れるのではなく、罪を犯すことによって、その罪が私たちと神との仕切りになってしまっています。

ですから、仕切りというのは、罪があることの厳しい現実を教えてください。人が何か悪いことを誰かに行えば、その関係が壊れてしまって、以前のような付き合いができなくなってしまいますが、それが神と自分との間にできてしまいます。アダムが、神から善悪の知識の木から実を取って食べてはならない、食べると必ず死ぬと言われた時に、神が命令を守らないアダムに対して、おしおきをするということではありません。自分にある罪が、神が近づいても、自分自身が神から遠ざかって、壁、あるいは仕切りを作ってしまうよ、ということを意味しています。事実、神が、「そよ風の吹くころ、彼らは、神である主が園を歩き回られる音を聞いた。(創世 3:8)」とあります。神のほう、そよ風の中で歩き回られていたのにも関わらず、恐ろしくなって身を隠しました。

## 2B 神の贖罪

### 1C 原初の住まい

神の目的は、初めの時から「人と共に住む」ということでした。言い換えると、人と交わりをする、ということです。共に同じところで時間を過ごし、語りかけ、また人が応答して、そのやり取りがあり、交わる、あるいは「住む」ということになります。世の初めには、それがエデンの園一帯でありました。云わば、エデンの園全体が、神の神殿と言ってもよかったです。そこに神が住まわれ、人に語られ、それを人が聞いて行くということがエデンの園においては、出来たのです。

### 2C いけにえ

ところが、アダムが罪を犯したので、神から離れるようになりました。けれども、神はすぐにアダムとエバが、その裸を恥ずかしくないように、あることをしてください。「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。(創世 3:21)」彼らが罪を犯したことによって、恥が与えられました。自分自身で覆いを作ろうとして、いちじくの葉を継ぎ合わせましたが、それでも恥は消えませんでした。しかし今、彼ら自身で恥を隠そうとするのではなく、主ご自身が身代わりの死をもって、二人の恥を覆ってくださったのです。ここから、「いけにえ」の制度が始まりました。「ヘブ 9:22 血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。」とあるように、血が流されていることをもって、しかも主ご自身が血を流すいけにえを備えられることによって、人の罪と恥が覆われます。なぜなら、罪を犯すと死んでしまうからです。

### 3C 幕屋(幕による仕切り)

神が、罪を赦したい、つまり罪を贖いたいと願われている、その情熱がその後の話に一貫しています。ノアもいけにえを捧げ、アブラハムも捧げました。そしてイスラエルを主が、モーセによってエジプトから出して、主がシナイ山にてモーセに、造りなさいと指示されたのが、あの「幕屋」であります。幕屋に特徴的なのは、何やらかにやら言っても、「幕という仕切り」があることです。外から入りますと、外庭の周りを囲む、掛け幕があります。東にある入口の幕を除けば、麻布によって造られた白い幕です。そしてその中で、祭壇があり、そこにイスラエルの民がいけにえを携えてくるように命じられています。そして祭司がいけにえを捧げるのです。

そして外庭の中央に、「聖所」があります。これは、細長い長方形の幕を縫い合わせて、二枚の幕にします。その聖所には、さらに二つの区域があります。一つはそのまま「聖所」と呼ばれているところ、そしてもう一つは聖なる所の中の聖なる所ということで、「至聖所」と呼びます。その聖所の部分と、至聖所の間にさらに垂れ幕がありました。ですから、三重もの仕切りです。イスラエル人が牛や羊を携えて幕屋に近づくと、外庭の掛け幕の東にある入口の幕をくぐります。それから祭司にいけにえを渡して、屠ってもらい、血を祭壇に注ぎ、また肉や脂肪を焼きます。そして聖所に入る時の入口の幕をくぐります。さらに大祭司だけが、年に一度、この垂れ幕があります。自分の罪のために牛を屠って、その血を携えて至聖所の中に入ります。また、イスラエルの民全体の罪の赦し、贖いのために、また別の羊を屠って、その血をそして至聖所にて、初めて主が語ってくださる、すなわち主と人が交わることができるということでもあります。

そしてイエス様が十字架上で死なれた直後に、真っ二つに裂けたのは、この垂れ幕でした。そうです、つまり神への道、神に近づく道が、真っ直ぐに開かれたことを意味します。

### 4C 大祭司による贖罪

幕屋の中の話に戻ります。至聖所に入るのは、唯一、大祭司だけです。しかも、年に一度、贖罪日の時にのみ、大祭司が自分の罪のためのいけにえを済ませて、それから民のために流された血を携えて、それで至聖所の中に注意深く入ります。そこで宥めの蓋の前で血を振りかけ、イスラエルの罪の贖いを成し遂げます。

このように、数多くの仕切りがあり、またいけにえもあり、どれだけ彼らが神との仕切りがあるかをまざまざと見せられていたことと思います。しかし同時に、聖なる神がおられることを、仕切りは思い起こします。主は聖なる方です。罪や汚れから隔絶された方であり、被造物とも隔絶された方です。初め、私たち人間はこの方と共にいました。罪がその間に仕切りを作りました。そこで神が、その仕切りを一つ一つ丁寧に取り除いて、人が神に近づける道を備えてくださいました。

このような神からの配慮と愛情を、人は考慮しないで、自分の方法で近づけるとしてしまいま

す。アダムとエバから生まれたカインは、自分の育てた作物をもって神に捧げようとしていました。しかし、神はその仕切りとなっている罪を取り除くために、羊によるいけにえを望まれました。弟アベルがそうしましたが、カインは自分は受け入れられず、アベルを神が受け入れたので、妬み、アベルを殺してしまいました。これは全て、「自分には罪があり、それで神と仕切りを作ってしまった」という認識がないために起こっていることです。自分には罪があると、認めておられるでしょうか？

そして、大祭司が年に一度、決められたいけにえを捧げ、血を携えることによるのみ入れる至聖所についても、「なぜそこまでする必要があるのか？他に方法があるのではないか？」と思われるかもしれません。事実、そうやって異なる形で灯火を携えて至聖所に入った人たちがいます。大祭司アロンの息子二人ナダブとアビフです(レビ 10:1)。すると、その火が突然大きな炎となったので、たちまち二人はその火に包まれて死んでしまったのです。聖なる神が、「このことによってあなたがたは、わたしに近づくことができるのだ。」と示してくださった道があるのに、それを無視して、拒んだところで、やはり受け入れられることはできないのです。

### 3B 肉体を取られた神

このような、とてつもない大きな天地を造られた神の、人を罪から贖いたい、救いたいと願われるご計画の中で、イエスがこの地上に現れました。そのご計画は、とんでもないものでした。「神ご自身の独り子である神が、その幕屋の仕切りとなってくださる」ということです。神が肉体を取られることによって、云わばその仕切りの幕となり、その仕切り自体を取り除くことをしてくださったのです。

### 1C 肉体という幕屋

ヨハネによる福音書は、祭司が幕屋に入って神に仕える手順と似ているとしばしば言われます。有名な言葉、1章14節にもそれが表れています。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」この言葉を直訳するとこうなります。「ことばは肉となって、私たちの間に幕屋を張られた。」神が肉体を取られて、人となり、それによって人々の間に神が住まわれるようにしていただきました。

### 2C 汚れに触れられる方

イエス様は、人としてはユダヤ教のラビ(教師)であり、弟子たちと共に過ごされました。その中で、しばしば取税人や罪人とみなされる人々とも食事をしておられました。それで、イエス様は、汚れからの分離を強調していたパリサイ派から非難を受けることとなります。そうです、イエス様は一見、罪に妥協しているかのような行動を取られたからです。

イエス様のところに、ツアラアト(らい病)に冒されている人が近づきました。レビ記 13-14章に、らい病を患った人々に対する神の教えがあります。彼らは汚れた者とみなされ、人が近づいてきた時に、「汚れている、汚れている！」と叫ばなければいけません。そして、イスラエルの住むところには一緒にいることができず、その外に乞食のようにして生きなければいけません。とこ

ろが、らい病人が近づいてきた時に、なんとイエス様は「手を伸ばして彼にさわり」とあります(マタイ 8:3)。これを、他の人が行ったら、汚れに触れたのですから、汚れた者となります。しかし反対のことが起こりました。神の清さをもって、らい病人が清められたのです。らい病の症状が完全に癒されたのです。

このように、イエス様は、単なる人であれば汚れてしまうのではないか？と思われることを、そのまま行っていたので、パリサイ人たちはそれを嫌い、イエス様が律法を破っていると思っていました。けれども、イエス様が単なる人ではなく、肉体を持った神の御子ご自身であることを知れば、その逆であることが分かるのです。この方が聖なる神と人との間にある仕切りを取り除かれていられる方であることを知ることができるのです。

いかがでしょうか、私たちは「疎外された社会」に生きていると言っても過言ではありません。新約聖書時代の中東は、今でいう人権は全く無かった苛酷な社会であります。日本とは大違いです。けれども、このような豊かで便利な社会に生きていても、私たちは一人一人のつながりが希薄な、人間疎外の社会に生きています。自分の全てを打ち明ける者なら、必ず嫌われ、無視され、まるで居ないかのようにあしらわれることを、心の奥底で大きな恐れとなっています。だから、自分を繕ったり、装ったりすることが空気のように習慣になっている。けれども、イエス様はまさに、そういった自分の負い目になっているところに、そのままの姿で触れる方です。私もそうでした、大学生活一年目で、仲間に嫌われていることを知って愕然としている時に、自分の醜さに気づいた時に、その惨めな中で祈ったら、そのまま全てを包んで受け入れられた神を感じました。

### 3C 罪を負われる方

このように、罪人に触れる働きをイエス様は行われましたが、最後は、罪そのものをご自分のせいにする働きをされたのです。それが、私たちがずっと見てきている、イエス様の有罪、十字架刑による処罰であります。イエス様が何か悪いことをしていないのに、無実なのに、全てがイエス様を有罪にする方向に、不可逆的に動いて行った。首謀者はユダヤ人指導者だと言えばその通りですが、それでもこんなに大騒動になり、過越の祭りの時は避けたいと言っていたのにそうならなかった、群衆を巻き込んだ死刑判決となったところで、自分たちが何とかできる範疇を越えていました。群衆も、その時に自分たちが何をしているか気づいていなかったでしょう。そしてイスカリオテのユダも、まさか死刑判決、そして十字架刑になるとは思ってもいなかったし、弟子たちも、そんなことは絶対にありえないと、イエス様の予告自体を受け入れていませんでした。

これらのことから何が言えるのでしょうか？イエス様ご自身が、父なる神からの御心によって、これらのことのお膳立てをされたのです。イエス様は言われました、「だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。わたしはこの命令を、わたしの父から受けたのです。(ヨハネ 10:18)」すべ

での計画は、父なる神が立てておえれ、イエス様がそれを実行されていました。ご自分が明確に、ご自身で命を捨てるように、無実であっても、それが有罪になるように、敢えてユダヤ人指導者やローマ当局の動きにご自分の身をゆだねられたのです。それは何よりも、ご自身が罪を負うことによって、私たち罪ある者が神から罪を赦され、そして神のところに近づくことができるようにするためでありました。

#### 4B 大胆に近づける神

したがって、今、垂れ幕が引き裂かれたというのは、キリストを肉体の垂れ幕として、そのまま神に近づくことができるようになったことを表します。「ヘブル 10:19-20 こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。」

#### 1C 神ご自身に

ですから、私たちは、終わりの日に全ての人をよみがえらせ、裁かれる方ご自身の前に出ても、それでも大胆にこの方に近づくことができるようになりました。「このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。(ローマ 5:2)」この「導き入れられる」は「アクセスがあります」という言葉に、英訳ではなっています。神に大胆に近づくアクセスがある、ということです。

私が初めてイスラエル旅行をした時に、アメリカからのグループに現地集合で合流する旅でありました。そのため、旅行仲間とは最終日に別れ、私はカルバリーチャペル・エルサレムの牧師さん宅に一晩泊まり、それから空港に向かいました。出国手続きは、必ず出発三時間前でないといけません。綿密な検査が待っているからです。女性が二人、私に尋問のように続けざまに質問します、それできちんと答えられなかったのか、私は別室に連れて行かれました。そこで、手荷物をことごとく、隅々まで調べられました。買ったノアの箱舟のオルゴールについて、「この中に何入っているの?」と聞かれ、「知るわけないでしょう?」と言いました。分解したようです。そして私の体は、男性が頭から足のつま先まで触りながら調べて行きました。とても丁寧なので、嫌な思いをさせませんでした、ものすごい徹底ぶりですね。

それで、検査が終わりましたが、搭乗時間が迫っています。いっしょに若い女性の検査員が、搭乗口まで案内するのです。外交官か乗務員の使う通路を使って、途中でセキュリティーのゲートを通って音がしますが、もちろん検査済みですからそのまま素通り、ものの 5 分で搭乗口まで到着です。VIP か、何か国のお偉いさんのような気分になりましたね。そしてこれが、イエス様が私たちにしてくださったことです。つまり、徹底的な検査は、この十字架刑に至る道なのです。イエス様が全てこのことをしてくださいました。全てしてくださったので、真っ直ぐに神のところに近づくことができ、それは特権であり、大いなる恵みなのです。

## 2C 互いに

そして、このように大胆に神に近づくことができる者たちが集まれば、キリストにあつて、互いの間にある仕切りや壁も崩れて、一つになることができます。「エペ 2:16-18 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。また、キリストは来て、遠くにいたあなたがたに平和を、また近くにいた人々にも平和を、福音として伝えられました。このキリストを通して、私たち二つのものが、一つの御霊によって御父に近づくことができます。」神の恵みとその寛容によって、今度はキリストにあつて互いに愛し合い、受け入れ合うことができるのだ、ということです。

## 3C 神と子羊の中にあるエルサレム

そしてこの交わりは、新しいエルサレムで完成します。神が、この天と地を過ぎ去らせ、新しい天と地を造られ、天からのエルサレムを新しい地上に降ろします。そして、そこでは太陽も月もないとあります。なぜなら、神ご自身と子羊なるキリストが輝いているから、その光があるということです。つまり、新しいエルサレムにいる住民は、神に近づくどころか、神とキリストの中にすっぽり住んでいるようになるということです！ここにおいて、神が願われている人に対する思い、共に住むということが完成します。

## 2A 上から下に裂けることの意味

そして時間が迫ってきましたが、もう一つ重要な点をご紹介します。ここで、「**上から下まで真っ二つに裂けた**」とあります。下から上に裂けたのではなく、上から下に裂けたのです。つまり、これは天から裂かれたということであり、神ご自身が裂かれたということです。神に近づくことができるようにされたのは、人の行いではなく、神ご自身によるもので、天からのものであるということです。

## 1B 御霊による誕生

使徒ヨハネは、福音書の中で、神に近づくことは、もっぱら人の意欲ではなく、神によってなされることを強調しています。「ヨハ 1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」生まれたという言葉が大事で、私たちが自分が生まれる時に、自分の意欲とか、望むことは一切できなかったように、新しく生まれて神の子供になることは、もっぱら神によるのだということです。

## 2B 上から下への下降

そして同じくヨハネの福音書には、3章に「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(3 節)」とイエス様が言われています。これは、他の訳ですと、「上から生まれなければ」となっています。そうです、下から、地上からではなく、上、天から生まれなければということなのです。私たちのキリスト者としての働きは、全て天から、上から与えられるものであり、私たちはその

中で生きているだけのものなのです。

それで続けてイエス様は、「だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。(13 節)」とされています。宗教は、自分の行いによって神に到達しようとする道を教えようとします。けれども、そもそも有限な人間がどうして無限の神に到達できるのでしょうか？でも、逆は可能ですね。無限の神が有限の人に近づくのです。それをしてくださったのが、キリストです。

### 3B 永遠の救い

そして「それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。(15 節)」とあります。もし私たちが、自分の罪があってそれで仕切りができてしまっているから、動物のいけにえをささげて、その都度に赦してもらったらどうでしょうか？ちょうどそれは、充電式の電池を、コンセントに差し込んで充電しても、また少なくなっているから充電しなければいけないようなものです。けれども、主は動物のいけにえにある不完全さを、完全にやめられました。キリストがただ一度、死なれることによって、その時に過去の罪だけでなく、現在も、未来に渡る、すべての罪を負わせたのです。ですから、一時期の罪の赦しではなく、永遠の救いをもたらす贖いを成し遂げてくださったのです。「ヘブル 10:11-14 さらに、祭司がみな、毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえを繰り返し献げても、それらは決して罪を除き去ることができませんが、キリストは、罪のために一つのいけにえを献げた後、永遠に神の右の座に着き、あとは、敵がご自分の足台とされるのを待っておられます。なぜなら、キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたからです。」

神が裂いてくださったのです。だから、永遠に救われており、永遠のいのちを受け取っているのです。この完成された業に私たちが休み、留まり、憩っている中で、主が御霊によってあなた方の生活に、ご自分の救いの御業を表してください。